
17. つながりあおう！ノコギリ歯形の町並みと町家の再生をめざして

黒江ワイワイ連絡協議会

(和歌山県海南市)

I. 活動の背景と目的

海南市黒江は江戸時代から続く漆器生産地で、当時の面影を留めた町家や町並みが残されている。これらの建物は地域文化を現代に伝える貴重な歴史的財産である。また、現代においても店舗として、生活空間として、より豊かな空間を演出する可能性を秘めている。

しかしながら、老朽化に伴う家屋の解体などにより年々伝統的な町家は姿を消し、黒江の特徴であるノコギリ歯形の町並みは、櫛の歯が欠けていくように連続性を失っている。

伝統的な町家が失われていく流れは、保全・再生に関する具体的な知識や技術面での情報の不足や町全体の取り組み、行政のサポートがなされていないことにも要因がある。多くの伝統的町家の居住者は孤立した状態で、維持管理や老朽化に伴う困難な問題に直面し、「古い家を住みやすく、改造するにはどうしたらいいのかしら…」「地震には大丈夫かしら…」「建て替えた方がいいのか、修理した方がいいのか…」との難問の前に困惑している。

他方、建物の修理、修復を専門に手がける建築医や技術者、さらに黒江の町並みや町家に関心のある研究者、建築家、行政担当者がある。個々に町づくりに関する企画やワークショップ開催などの活動を展開しているが、これらの異なる立場の人々が手をつなぎ合い、ネットワークを形成し、コミュニケーションが上手くなされたら、伝統的な建物を現代に活かした町づくりも可能である。

本活動は、このような背景から、居住者と関係専門家（研究者、建築医、建築家、行政担当者、技術者）のネットワーク形成と新たな連帯による伝統的町家を活かした町づくりを目指して、始められたものである。



黒江川端通り町並み



黒江ノコギリ歯形の町並み

II. 活動の内容

1. 町並みウォッチング&ネットワーキング、検討会

活動は、天候のよい5月に町並みウォッチングからはじめられた。各自自由に町並みを

探索しながら、活動内容や対象を検討。ノコギリ歯形の町並みが継承されている地域や、「紀州連子格子」などの黒江の町家の特徴を再確認し、建物の老朽度、修理、修復の状況のチェックもおこなわれる。並行して、メンバー相互の交流、ネットワーク形成も活発になされる。

町並みウォッチング終了後、町家再生活用の先駆的事例である黒江ぬりもの館（漆器直販店）に集合して、活動内容と対象町並み、町家の検討をおこなう。その結果、部分的な修理技法、技術の検討に取り組むのではなく、建て替え予定のある町家の再生案を皆で提案することが決まる。



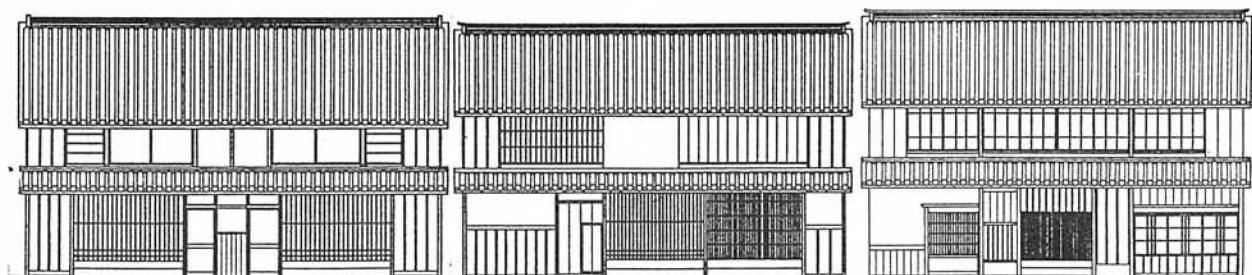
町並みウォッチング



検討会風景

2. 対象家屋概要

対象町家は海南市の地場産業である棕櫚加工と小売りを生業にする家屋である。江戸末期頃の建物と推定される。黒江ぬりもの館に隣接し、漆器卸売り店やかつての漆器職人の長屋が並ぶ町並みの要所に位置しているため、当家の建築が町並み景観に及ぼす影響は大きい。鉄骨で新築される計画であるが既存家屋を修理・修復し、再生する計画案を提示し、ノコギリ歯形の連続した町並み景観の保存を試みる。



黒江ぬりもの館

対象家屋

図1 対象家屋町並み

3. 対象家屋調査

各人の得意な分野を活かした役割分担（建築計画関係、構造・家屋修理関係、建築法規・条例関係、住民意識・住要求関係）をおこない、主担当者が決まる。

調査には全員が参加し、既存資料を基に家屋や生活財の調査をし、平面図、断面図、配置図を採取する。また、和歌山県文化財センターチームによる家屋不陸測定調査などにより構造体の状況確認がおこなわれる。その結果、白蟻の被害や腐朽が少なく、構造的には補修、補強を要するが、再生の可能性は十分あるとの結論に至る。主要構造材は触らず、必要に応じて補強しながら、再生する方向を模索する。平面形式は整形四間取り型の黒江の典型的な間取り形式である。居住者に住要求や今後の建物の活用用途などの聞き取り調査を数回実施する。



対象家屋調査



住民への聞き取り調査

4. 再生計画案作製および今後の活動方向の検討

黒江の古い町並みを活かしていく趣旨から考え、外観は現状を大きく変容させずに格子などの伝統的な構成要素を上手く整備しながら町並み景観を守っていく方向とし、平面プランの作製、検討に活動内容の重点が置かれる。

棕櫚加工の仕事場と小売コーナー、居住空間のゾーニングがポイントとなる。伝統的な平面プランを生かした5案が提示される。その後、1案が加えられ、居住者の家族全員を含めて計画案の検討を重ねる。図面表現だけでなく、設計のポイントや各部の仕上げ材などに関して文書でまとめる方法を取り、居住者にわかりやすく説明する。計画案は居住者の住要求を単に組み入れるだけでなく、床座を主にした住まい方や吹き抜け、中庭の活用などの家屋に合わせた住まい方を提案し、何度も協議する中で修正を重ねる。第4回以降は、再生計画案を現実化するために必要な条例や建築基準法上の問題点の検討にも入る。

第6回の最終会では、次年度の活動内容が検討される。伝統的な町家を活かした町づくりに向けて、他の町家をも手がけながらネットワークや活動の拡大をはかることが確認される。

III. 活動の効果および今後の課題

伝統的町家の修復・再生に向けて、第一目的であった居住者、研究者、建築家、行政担当者、技術者のネットワーク（黒江ワイワイ連絡協議会）は当初のメンバーに加え、文化財関係の専門的な技術者や地方行政担当者、学生らがさらに加わり、輪が広がっている。コ

コミュニケーションも活発になされ、居住者が抱える問題を検討するのに十分な体制ができている。今回形成されたネットワークは、相互交流により力量を増し、各分野の地域活動の核となり、発展した活動へと進んでいる。

また、活動内容の具体的な成果としては、町家（作業場・店・住居併用）再生事例への足がかりを得た点である。問題点としては、歴史的町並み保存地区としては未指定地域であるために現行の建築基準法に従うと、道路幅の問題から道路中心から2 mの範囲でセットバックしなければならない。道路幅の問題は伝統的町並みや町家の継承を妨げ、ノコギリ歯形の町並み景観が崩れる大きな要因となっている。和歌山県土木部建築課とも協議を重ねているが、緊急時や防災にも配慮した何らかの対策を講じながらも、地方行政へ条令制定の働きかけ等の新たな段階の課題に取り組まなければならない。

他方、発展成果としては、日本建築学会主催の設計競技「住み続けられる"まち"の再生」の公募に、本活動に興味をもち参加している和歌山大学システム工学部学生と研究者がチームを組み、黒江の再生計画案で応募し、近畿支部から全国大会へ選出される成果へと実を結んでいる。伝統的な地場産業集積地域として、周辺地域との連携をも考慮した計画案で、本活動の対象家屋のプランをも組み入れて創出したものである。

今後は、歴史的町家、町並みを活かした町づくりに向けて、ネットワークの拡大や活動対象と内容を発展させることが必要である。そこで、まず建築的な側面から形成された「黒江ワイワイ連絡協議会」のネットワークと町家活用面のボランティア組織「黒江のあがえ（我家）」との融合を図り、活動の拡大を試みる。「黒江のあがえ」は町の中心街である川端通り（写真1）に位置する町家で、コミュニティや文化の拠点として再生活活用面での成果をみたが、家屋は老朽化に伴う補修、修復が早急に求められている。

「黒江のあがえ」以外のその他の建物にも取り組む計画であるが、和歌山県では伝統的家屋再生の先駆的な事例が少ないために、他府県の先進事例を参照する中で、示唆を得るなどの多方面の活動をも取り入れる予定である。